TADOKU JUNIOR　グリム童話　★★★☆☆ ふつう　743語

The Elves and the Shoemaker

こびとのくつや

Brothers Grimm (tr. Edgar Taylor & Marian Edwardes)（1823年の本）　原文そのまま　朗読：Bob Neufeld

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　まじめなのにまずしいくつや。最後の皮を切っておくと、次の朝にはりっぱなくつができていました。いったいだれが作ってくれたのでしょう？



There was once a shoemaker, who worked very hard and was very honest: but still he could not earn enough to live upon; and at last all he had in the world was gone, save just leather enough to make one pair of shoes.

Then he cut his leather out, all ready to make up the next day, meaning to rise early in the morning to his work. His conscience was clear and his heart light amidst all his troubles; so he went peaceably to bed, left all his cares to Heaven, and soon fell asleep. In the morning after he had said his prayers, he sat himself down to his work; when, to his great wonder, there stood the shoes all ready made, upon the table. The good man knew not what to say or think at such an odd thing happening. He looked at the workmanship; there was not one false stitch in the whole job; all was so neat and true, that it was quite a masterpiece.

The same day a customer came in, and the shoes suited him so well that he willingly paid a price higher than usual for them; and the poor shoemaker, with the money, bought leather enough to make two pairs more. In the evening he cut out the work, and went to bed early, that he might get up and begin betimes next day; but he was saved all the trouble, for when he got up in the morning the work was done ready to his hand. Soon in came buyers, who paid him handsomely for his goods, so that he bought leather enough for four pair more. He cut out the work again overnight and found it done in the morning, as before; and so it went on for some time: what was got ready in the evening was always done by daybreak, and the good man soon became thriving and well off again.

One evening, about Christmas-time, as he and his wife were sitting over the fire chatting together, he said to her, 'I should like to sit up and watch tonight, that we may see who it is that comes and does my work for me.' The wife liked the thought; so they left a light burning, and hid themselves in a corner of the room, behind a curtain that was hung up there, and watched what would happen.

As soon as it was midnight, there came in two little naked dwarfs; and they sat themselves upon the shoemaker's bench, took up all the work that was cut out, and began to ply with their little fingers, stitching and rapping and tapping away at such a rate, that the shoemaker was all wonder, and could not take his eyes off them. And on they went, till the job was quite done, and the shoes stood ready for use upon the table. This was long before daybreak; and then they bustled away as quick as lightning.

The next day the wife said to the shoemaker. 'These little wights have made us rich, and we ought to be thankful to them, and do them a good turn if we can. I am quite sorry to see them run about as they do; and indeed it is not very decent, for they have nothing upon their backs to keep off the cold. I'll tell you what, I will make each of them a shirt, and a coat and waistcoat, and a pair of pantaloons into the bargain; and do you make each of them a little pair of shoes.'

The thought pleased the good cobbler very much; and one evening, when all the things were ready, they laid them on the table, instead of the work that they used to cut out, and then went and hid themselves, to watch what the little elves would do.

About midnight in they came, dancing and skipping, hopped round the room, and then went to sit down to their work as usual; but when they saw the clothes lying for them, they laughed and chuckled, and seemed mightily delighted.

Then they dressed themselves in the twinkling of an eye, and danced and capered and sprang about, as merry as could be; till at last they danced out at the door, and away over the green.

The good couple saw them no more; but everything went well with them from that time forward, as long as they lived.

むかし、一人のくつやがいました。くつやはいっしょうけんめい働き、とても正直な人でしたが、それでもくらしていけるだけのお金をかせげませんでした。とうとう、持っているものは何もかもなくなり、くつ1足分の皮だけが残りました。

そこでくつやは、次の日にすぐくつがぬえるように、皮を切っておきました。朝早く起きて仕事をするつもりでした。いろいろこまったことがあっても、くつやの心はやましいところがなく、晴れやかでした。そこで、心配ごとはみんな神さまにおまかせして、おだやかな気持ちでベッドに入り、すぐにねむってしまいました。朝になって、おいのりをすませてから仕事にとりかかろうとすると、なんとおどろいたことに、テーブルの上に、くつがすっかりでき上がっておいてあるではありませんか。こんなふしぎなことがおこって、人のいいくつやは、何と言っていいのか、どう考えていいのかわかりませんでした。くつのできばえを見てみると、ぬい目は一つもまちがっていませんでした。何もかもがきちんと正確で、すばらしい名人の作品でした。

その日、お客さんがやってきました。お客さんはそのくつがとても気に入ったので、いつもより高いお金を喜んではらってくれました。まずしいくつやは、そのお金で、くつをもう2足作れるだけの皮を買いました。夕方、くつやは皮を切っておいて、次の日早く起きて仕事をはじめられるように、早めにベッドに入りました。けれども、その手間はいりませんでした。朝起きてみると、仕事はもうすっかりできていたのです。まもなくお客さんたちがやってきて、くつにたっぷりお金をはらってくれたので、くつやは、くつをもう4足作れるだけの皮を買いました。くつやはまた夜のうちに皮を切っておきました。すると朝には、前と同じように、くつができていました。そんなふうにしばらくつづきました。夕方に用意しておいたものは、いつも夜明けまでにでき上がっていて、人のいいくつやは、まもなくまたゆたかなくらしができるようになりました。

クリスマスが近いある晩、くつやとおくさんが火のそばにすわっておしゃべりをしていると、くつやがおくさんに言いました。「今夜はねないで見はっていたいんだ。だれが来て、わたしの仕事をしてくれているのか、見てみようじゃないか。」おくさんもそれはいい考えだと思いました。そこで二人はあかりをつけたままにして、部屋のすみにかかっているカーテンのうしろにかくれ、何がおこるか見はっていました。

真夜中になると、はだかの小さなこびとが二人入ってきました。こびとたちはくつやの仕事台にすわり、切っておいた皮を全部手に取って、小さな指でぬったり、トントン、コンコンたたいたり、それはそれはすばやく仕事をはじめました。くつやはすっかりおどろいて、こびとたちから目がはなせませんでした。こびとたちはどんどん仕事をつづけ、とうとうすっかりでき上がって、すぐにはけるくつがテーブルの上にならびました。それは夜が明けるずっと前のことでした。こびとたちは、いなずまのような速さで、さっさと出ていってしまいました。

次の日、おくさんがくつやに言いました。「あの小さな人たちのおかげで、わたしたちはお金持ちになれたのね。お礼をしなくちゃいけないわ。できることなら、何かいいことをしてあげましょうよ。あんなふうに走りまわっているのを見ると、とてもかわいそうになるわ。それに、あまりおぎょうぎがいいとは言えない

わね。寒さをふせぐものを何も着ていないんですもの。そうだわ、わたしがあの人たちに、シャツと上着とチョッキ、それにズボンも1まいずつ作ってあげるわ。あなたは、小さなくつを1足ずつ作ってあげてね。」

人のいいくつやは、その考えがとても気に入りました。そしてある晩、全部できあがると、二人はいつも切っておく皮のかわりに、それをテーブルの上にならべました。それからまたかくれて、小さなこびとたちがどうするか見はっていました。

真夜中ごろ、こびとたちはおどったり、スキップしたりしながら入ってきて、部屋の中をぴょんぴょんはねまわり、いつものように仕事をしようとすわりました。ところが、自分たちのために服がおいてあるのを見ると、くすくす、けらけらと笑って、それはそれは大喜びのようすでした。

それからこびとたちは、あっというまに服を着て、これ以上ないほど楽しそうに、おどったり、はねたり、とびまわったりしました。そしてとうとう、おどりながら戸口から出ていき、草原の向こうへ行ってしまいました。

くつやの夫婦は、それからもうこびとたちを見ることはありませんでした。けれども、二人はそれから一生、何もかもうまくいきました。

たんご と クイズ こびとのくつや

shoemaker くつや	**leather** 皮・革	**shoes** くつ
curtain カーテン	**dwarfs** こびと	**shirt** シャツ
coat 上着		

Q1 お話のはじめ、くつやに残っていたものは？

① くつ4足分の皮　② くつ1足分の皮　③ 何も残っていなかった

Q2 くつやとおくさんは、どこにかくれて見はっていた？

① ベッドの下　② 戸だなの中　③ カーテンのうしろ

Q3 おくさんがこびとたちに服を作ってあげようと思ったのは、どうして？

① こびとたちがはだかで寒そうだったから　② くつやが作れと言ったから　③ クリスマスだったから

こたえ

Q1 ② まじめに働いても、くらしはまずしく、とうとうくつ1足分の皮しか残っていませんでした。

Q2 ③ あかりをつけたまま、部屋のすみのカーテンのうしろにかくれて見はっていました。すると真夜中に、こびとがやってきました。

Q3 ① こびとたちは寒さをふせぐものを何も着ていなかったので、お礼に服を作ってあげようと思いました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #2591（Brothers Grimm (tr. Edgar Taylor & Marian Edwardes)、1823年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Bob Neufeld（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。